

# 町村週報

(町村の購読料は会費)  
の中に含まれております)

## 3081号

毎週月曜日発行

発行所 全国町村会 〒100-0014 東京都千代田区永田町1丁目11番35号：電話03-3581-0486 FAX03-3580-5955

発行人 武居丈二：定価1部40円・年間1,500円(税、送料含む) 振替口座00110-8-47697

<http://www.zck.or.jp>



仁淀ブルー(高知県仁淀川町 安居渓谷)

### もくじ

- 随情 ● フォーラム ● 活
- 想報 ● 動 ● 動

「地域農政未来塾」(第4期生)を開講  
 〓 将来を展望した農政を先行できる職員を養成〓……………(2)

第11回まち・ひと・しごと創生担当大臣と地方六団体との意見交換会に荒木会長が出席……………(4)

農水産業と観光産業が融合する村  
 「サン」の村宣言」プロジェクトで持続可能なむらづくりー沖繩県恩納村……………(6)

町村Navier……………(10)

交わりのまち、混ざりのまち基山町……………佐賀県基山町長 松田 一也……………(11)

### コラム

## 小さな村から学んだこと

民俗研究家 結城登美雄

東北地方を中心に中山間地域の小さな村々をたずね歩いてもうすぐ30年になる。たずねた集落は約600。実に多くの村人から大切なことを教えていただいた。過疎地、限界集落など、負の言葉で語られがちなこれらの地を、なぜたずね歩いたのか。それはこれらの村が人口は減ってもなぜ何百年も人間の暮らしと人生の場であり続けられたのか。その持続可能な力と心を確かめたいと思ったからである。そしてもうひとつ、これからの地域づくりにとって大切なものは何か。それを有識者や現場知らずの霞ヶ関の言説ではなく、小さな村を生き抜いてきた人々の悩みや願いを通して直接に学びたいと思ったからである。

たくさんの村人が示してくれた意見を私なりに受けとめれば、それは「よい地域づくりの7つのテーマ」になると思われる。すなわち、①よい仕事づくり②よい居住環境づくり③よい文化づくり④よい学びの場づくり⑤よい仲間づくり⑥自然と風土の上手な活用⑦よい行政の7つのテーマである。これを少し補足すれば、①は農林漁業などの生産を安定させること。この30年で急速に普及した農産物直売所は現場の実状に即応した希望の拠点だ。②は道路、上下水道などのインフラ整備。③の文化とは伝統的祭りのように村人みんなで楽しむ場を作ること。④の学びとは知識主義ではなく、地域で生きていくための知恵や身近な資源を生かすための技の習得。⑤は村人が最も大切だと強調するもの。人は一人では生きられない。共に支え合っていき隣人、友人の大切さ。⑥人間は自然と共に生きるもの。水・風・光・土を大切に持続可能な生存と生活の土台を築くこと。⑦主体なき地域づくりはない。よい村を作るのはそこに生きる村人が中心である。相変わらずの画一的行政施策の押しつけではなく、地域の人々の声に耳を傾け、その願いや悩みを受け止め、その活動に寄り添う行政でありたい。小さな村が静かに行政に問いかけている。

### 写真キャプション

仁淀川は全国一位の水質と評された経験を持ち、その透明度や青さから「仁淀ブルー」の愛称で親しまれている。また、砂防ダムから流れ落ちる水のカーテンも見所の一つで、写真家やアーティストから注目を集めている。日光がよく当たる昼の時間帯に訪れるのがおすすめ。

## 全国町村会

## 「地域農政未来塾」(第4期生)を開講

～将来を展望した農政を実行できる職員を養成～



▲挨拶する荒木会長

地域農政未来塾は、農業・農村を取り巻く環境が大きく変化している中、地域の実情と課題を把握し、将来を展望した農政を提案、実行できる職員を養成することを目的に平成28年から開講している。セミナー形式による少人数の受講形態を採用するほか、農業・食料・農村問題をはじめ、地域づくりや自治体行政など、各界を代表する十数名の講師陣を迎え、実技・実践を含め充実したカリキュラムを学ぶことができる。

塾長を生源寺眞一福島大学教授が、主任講師を小田切徳美明治大学教授、榎田みどり明治大学客員教授、荏林幹太郎学習院女子大学教授、中

全国町村会（会長・荒木泰臣熊本県嘉島町長）は、5月15日、町村の農政担当職員を対象とした「地域農政未来塾」の開講式を行った。四期目となる今回は、19名の町村職員を塾生に来年1月まで計7回の講座を開くこととしており、地域の課題に対応した農業・農村政策を実践できる農政担当者の養成を目指す。



▲塾長：生源寺福島大学教授

「これまで3期の塾生を送り出したことや、同期生との出会いが、この先、皆さんの人生の大きな力になることをお約束する」と述べた。

次に塾長の生源寺福島大学教授が「全国町村会館で行った開講式では、はじめに荒木全国町村会会長が挨拶に立ち、この地域農政未来塾は、その名の通り、地域の未来を担っていく人づくりのため、3年前に開講した。第4期生の皆さんには、地域の課題に気づくための知識や観察力、解決策を提案するための思考力、周りを説得しつつ物事を進めていく行動力をこの塾で身につけ、積極的に地域づくりを担っていただきたい。この塾でこれから学んでいただくことや、同期生との出会いが、この先、皆さんの人生の大きな力になることをお約束する」と述べた。

塾生は、全国の町村役場に勤務する職員を対象に募集し、選考を経て決定した19名。受講を通じた交流により、ネットワークの形成も期待される。

鳴康博東京大学大学院教授（五十音順）が務める。

活 動



▲来賓：末松農林水産事務次官

経験から、今回の塾においても塾生を送り出していただいた町村に報いることができる成果を得られると確信している。塾生の皆さんには、知識だけでなく、ものの考え方や着眼点、またそれらを積極的に発言していくことのできる力を身につけていただきたい。そして4期生同士の横のつながり、1〜3期生との縦の繋がりを活用することで、自身の町村の強みや特色を再認識し、さらに発揮できるように、また、地域を支える人材として皆さん方が成長していくことを心から願う」と挨拶した。



▲主任講師：右から小田切氏・榊田氏・荘林氏・中嶋氏

来賓として臨席した末松広行農林水産事務次官は、「これからは農林水産業やその関連産業が地域を引っ張る時代になる。皆さんには塾を通してその時代の花を咲かせる議論をしていただければと思う。皆さんが学ばれたことを国の行政や都道府県の行政にもぜひ活かしていただき、国と都道府県、市町村が一体となってこの国を良くしていくことができよう頑張っていたいただきたい」と挨拶した。



▲山口山形県小国町副町長



▲鈴木山形県金山町長

引き続き、小田切明治大学教授など4名の主任講師と皆川芳嗣(株)農林中金総合研究所理事長(地域農政未来塾運営委員長)など関係者を紹介。この後、町村関係者を代表し、鈴木山形県金山町長が「4期生の皆さんにはぜひ塾の中で有意義な時間を過ごしていただき、自分のこれらのエネルギーを掴み取っていただければと思う。職場の方、そしてご家族の方が背中を押して皆さんを応援していただいていると思うので、体調を崩さないようにしてこの1年間を頑張っていたいただきたい」と激励した。

また、山口政幸山形県小国町副町長からは、「今町村は人口減少、少子高齢化に伴う新しい地域づくりが求められている。大事なことは人口の規模ではなく暮らしの豊かさや旬の警沢を享受できる付加価値作りではないかと思う。ぜひ皆さんには地域の個性を発揮する豊かな想像力を高め、素晴らしい人材として派遣元に戻ってこられることを願う」との言葉があった。



▲第4期の塾生の皆さん

最後に塾生を代表して茨城県茨城町の真田裕美子氏が「この塾には町村職員として他の研修では得ることのできない貴重な学びの機会が得られるものと期待して応募した。日本の農業農村は大変な転換期を迎えている。茨城町でも後継者不足が大きな問題となっており、担い手への集積が急務の課題である。地域農業の課題解決に向け、塾生同士助け合いながら自ら考え提案し行動できる職員となるべく懸命に取り組み決意である」と挨拶を述べ、開講式を閉会した。

## 第11回まち・ひと・しごと創生担当大臣と 地方六団体との意見交換会に荒木会長が出席

まち・ひと・しごと創生担当大臣と地方六団体との意見交換会(第11回)が、5月16日に開催され、全国町村会の荒木泰臣会長(熊本県嘉島町長)をはじめ地方六団体の代表が出席。政府側から出席した片山まち・ひと・しごと創生担当大臣等と「まち・ひと・しごと創生基本方針2019」の策定等について意見交換を行った。



意見交換会では、冒頭、片山大臣が、「今年第1期まち・ひと・しごと創生総合戦略の最終年であり、非常に重要な年である。これまでの4年間の地方創生の取組の成果は出てきていると感じているが、その成果と課題を検証し、謙虚に受け止め、第2期につなげていくことが我々の使命である」と述べたうえで、「現在、第2期総合戦略の策定に向けた有識者会議において、第1期の成果や課題について、地方に『しごと』をつくる、地方への新しい『ひと』の流れをつくる、結婚・子育ての希望実現、『まち』をつくるという4つの基本目標(KPI)に基づいた検証を行っている。第2期については、推進すべき重要テーマとして、人材・



▲挨拶する片山大臣

組織の育成と関係人口、稼げるしごと働き方、未来技術と地方創生そして少子化対策、全世代活躍まちづくりなどを掲げ、皆さまと意見交換をし、議論を進めている。また、多文化共生、SDGs、地域交通、スポーツ健康まちづくりについても、重要なテーマとして検討を進めている。本日の議論を踏まえて、まち・ひと・しごと創生基本方針2019の6月中の閣議決定を予定しているが、これが地方創生のネクストステージである第2期総合戦略の方向性となるので、皆さまのご意見を賜りたい」と挨拶した。

本方針2019の策定については、第9次地方分権一括法案等の説明があった後、意見交換が行われた。意見交換の場で、荒木会長をはじめ、東京一極集中の是正と「地域の多様性」について、「地域の現場からの地方創生なくして日本の創生はなく、東京一極集中の是正は必須である。このためには、日本全体の国土・地方のあり方を、『地域の多様性』を大切に、東京圏にはない魅力・活力を生み出して分散型に変えていくことが極めて重要である。分散しながらも、地域の資源・特性を生かしネットワークでつながり、地域同士連携・協力しながら、輝いていくことが、令和の時代にふさわしい地域のかたちではないかと考える。また、地方の中枢中核都市、拠点都市等へのミニー極集中で周縁部が衰退しないよう、十分に留意いただきたい。また、こうした町村の取組を実現するためには、財政的・制度的な支援が不可欠なので、益々の力添えをよろしく願います」と述べた。

次に、「地方創生推進交付金」及び「まち・ひと・しごと創生事業費」について、「地方創生の実現には、息の長い取組が必要である。『地方創生推進交付金』及び『まち・ひと・

## 活 動



▲意見を述べる荒木会長

しごと創生事業費』については、その総額を長期にわたり安定的に確保していただくようお願いする。また、町村の取組を積極的に応援していただくためにも、交付金事業については、新たな発想や創意工夫を活かした事業に柔軟かつ積極的に取り組めるよう、できる限り対象事業の要件を緩和するなど、規模の小さな町村においても、より使い勝手の良いものとするようお願いする」と求めた。

また、「ひと」に注目した政策と「Society5.0」時代に向けた各種政策の推進について、「町村は、小規模であるがゆえに、住民一人ひとりの存在が大きく、少ない人数で農山漁村地域の広大な国土を守り育てている。人口減少時代には『ひと』に着目した政策が益々重要になる」としたうえで、「地域おこし協力隊制度や今年度からスタートした地方創生起業支援事業、地方創生移住支援

事業をはじめ、テレワーク・サテライトオフィス等地方でのビジネス環境整備などを更に推進していくことや、大都市の企業を退職した人材をもっと生かすこともできると思う。さらに子供たちの農山漁村体験交流、高校・大学との連携も重要なテーマである。その際、これは『Society5.0』の推進にも関わるが、情報通信環境の一層の整備は不可欠である。特に条件不利地域において、ブロードバンド環境や5Gのような情報インフラについては、国等の支援なくしては整備が困難であるため、更なる積極的な対応をお願いする」と述べ、発言を締め括った。

地方六団体の意見を受け、片山大臣は、地方創生推進交付金について、「財源確保と使い勝手は車の両輪である。財源がきっかけにならないと新機軸のことを進めるのは難しい。その点は在り方検討会において引き続き議論をし、弾みになる形で6月の新方針に盛り込んでいきたい」としたほか、第2期総合戦略の策定については、「産官学金労言士をフル活用し、皆に参加していただくことが必要である。5Gの運用が来年から始まるが、離島や中山間地域のようないったところにとっかかりとした標準

APIの基盤をつくることに対し、先には支援することを想定している」と応えた。

また、関係人口については、「UJターン」のマッチング支援については38道府県に既にプラットフォームを作っていたが、今後民間企業に無料で全国一元的な求人情報とそのプラットフォームの連携をしていただく。それが始まるとUJターンによる移住者が増えていくのではないかと期待している。また、移住まで行かなくても、関わっていただく人口を増やすことをより考えていきたい」と述べた。

この他、地方拠点強化税制の延長・拡充や企業版ふるさと納税の拡充、外国人との共生などについても、早急に対策を考えていきたいとした。

最後に、「地方の中山間地域や離島がITやAIによって救われるような使い方を日本が世界に先駆けて打ち出す方向で舵を切っている。今度の第2期総合戦略では、条件不利地域のことを十分に考慮し、今までは1741市町村が画一的な発想であったが、実際にはそれぞれに有利不利があるためその点も考えていきたい」との発言があった。

## 車両共済(保険)のご案内

この車両共済(保険)は、町村生協の自動車共済で補償する対人賠償、対物賠償、限定搭乗者傷害等に加え「ご自身のおクルマの補償(車両保険)」を追加する制度です。お車が衝突した場合や台風・いたずら・盗難など偶然な事故で損害を被ったときに、共済(保険)金をお支払いします。

●お見積りのご請求・お申込み・お問い合わせなどは、下記までご連絡ください●

### 株式会社 千里 (取扱代理店)

〒100-0014 東京都千代田区永田町1-11-32 全国町村会館西館内  
●ホームページアドレス <http://www.chisato-ag.co.jp>

お電話の際には、車検証をお手元にご用意ください

(受付時間：祝日、年末年始を除く月～金 午前9時30分～午後5時)

TEL 0120-731-087 FAX 03-3519-7325

- 「車両共済(保険)制度」は、全国町村職員生活協同組合と損害保険ジャパン日本興亜株式会社とが集团協契約を締結し、実施しているものです。
- 集团協としてご契約いただけるのは、保険契約者および被保険者が損保ジャパン日本興亜の定める条件を満たす場合のみとなります。このご案内は概要を説明したものです。詳細については、取扱代理店(千里)までお問い合わせください。

(車両保険引受保険会社) 損害保険ジャパン日本興亜株式会社

SJNK17-16682(2017.12.28作成)

養殖サンゴ

# 現地レポート 町村独自のまちづくり



## 「サンゴの村宣言」プロジェクトで持続可能なむらづくり 農水産業と観光産業が融合する村

### 沖縄県 恩納村

#### 恩納村の概要

恩納村は、県都那覇市より北に約50km、沖縄本島のほぼ中央部の西海岸側に位置し、西側は全域が沖縄海岸国定公園に指定され、東側は南北にわたる丘陵地（山林）となっており、豊かな自然に恵まれています。

村の人口は11,005人、世帯数は5,295世帯（2019年3月末現在）となっており、リゾート施設周辺の飲食店や関連産業の立地に伴い増加傾向で、沖縄科学技術大学院大学（OIST）やリゾートホテルの増加により外国人も増加している状況です。

風光明媚な自然に恵まれ、穏やかな環境とともに観光リゾート地として成長し、海岸沿いを中心に96件の宿泊施設が立地し、年間延べ294万2千人の観光客が宿泊しています。それに伴

い、産業別就業業者数も第3次産業の割合が多くなっています。2012年には、世界最高水準の研究実施と人材輩出を目指す沖縄科学技術大学院大学（OIST）が開学し、世界各国から約500人の学生・職員



▲アーサ畑風景



フォーラム

が従事しており、観光リゾート施設だけでなく、学術機能としてもグローバル化が進んでいます。

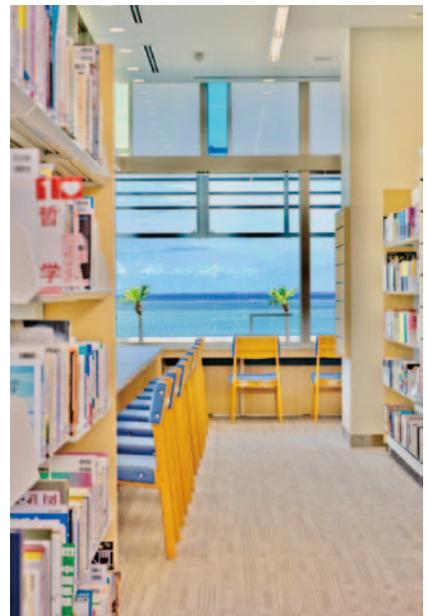
また、海ブドウ、モズク、アーサをはじめとする水産業、小菊を主力とする花卉類やパッションフルーツ、マンゴー、アテモヤなどの果樹類を中心とする農業なども盛んに行われています。特に、糸モズクや天皇杯を受賞した海ブドウの品質は高く、県外にも出荷されています。

2018年には村制施行110周年を迎え、SDGsによる持続可能な地域経済の活性化、地域の振興などを推進し、また、若者定住の促進、子育て環境の整備、教育環境の充実など地方創生の取組を推進しています。

文化情報センターの魅力

恩納村文化情報センターは、2015年4月に開館し、現在5年目を迎える図書館機能を備えた複合施設です。恩納村文化情報センターの特徴は観光情報を図書館サービスに取り入れた点にあり、特筆すべきは、入館者・貸出人数・貸出冊数ともに毎年増加しつつあることです。1階には観光情報フロア、イベントや学習スペースに使える多目的ルーム、2階は海を見ながら読書ができる図書情報フロア、3階が展望室となっています。また、既存の博物館と廊下で繋がっており、図書

自慢の海が広がる読書スペース



館・博物館が一体となった活動をしています。博物館の1階は村史編さん室となっており、博物館・村史編さん室と協力したレファレンス体制も整っています。

●観光フロア機能

観光情報フロアは観光客の情報ニーズに応える様々なコンテンツを用意しています。提供する情報には、事業者から寄せられるもののほか、住民と一緒に作り上げていくコンテンツ(キオボード/キオクバンク)などもあり、観光情報誌には載らない写真や村の情報なども閲覧できます。

●図書館機能

図書情報フロアの閲覧室は、東シナ海のコバルトブルーの海を眺めながら読書ができる眺望が特徴です。一般図書や児童図書、視聴覚資料のほか、郷土書を活用した観光情報を提供しています。村内のホテルに対しては団体貸

出制度を活用したミニライブラリー事業も行い、村内の利用者のみならず、観光客も本を借りることが可能なため、県外の方の利用登録も多くなっています。また、恩納村ならではの立地を活かしたイベントも好評です。

『サンセットウィーク』では「閉館時間は夕陽が沈むとき」をキャッチフレーズに、通常平日19時、土日17時の閉館時間を「夕陽が沈みきるまで」としています。夏場は20時ごろまで明るいので綺麗な夕日を楽しみながら普段より少しだけ長く滞在できるようになっています。『海辺のナイトシネマ』では文化情報センターの目の前、海のそばの遊歩道に大きなスクリーンを立てて映画上映会を行います。潮風のごちよさや海の匂いを感じながら夕焼けとともに映画を鑑賞します。また館内で楽器の演奏を楽しむ『ライブラリーコンサート』なども行っています。

●サンゴの村宣言関連の取組

後述する「サンゴの村宣言」と関連した事業として、サンゴの絵本作りやかるた作りにも取り組んでいます。サンゴに関する学習をセットにした講座で、出来上がった作品は製本や製品化することによって広く流通し、恩納村

の取組を知っていただくことに役立っています。

文化情報センターで行う観光情報提供サービスの特徴は、単に観光客向けの情報を扱うのではなく、住民にとって有益な情報を観光客に提供するというところにあります。観光スポットや遊びの情報以外にも文化や歴史風土、芸能や文学など様々な角度から村や沖縄を知ってもらうことを心がけています。住民のために行うサービスが結果として観光サービスにもつながるといいます。

村の魅力村民とともに発見し、情報を蓄積し、訪れる観光客に伝える情報センターとして、村の情報収集・情報発信拠点施設としての役割を担っています。



▲潮風を感じながら映画を楽しめる「海辺のナイトシネマ」

フォーラム



▲恩納村文化情報センター

シンカプロジェクト

若い農業者の就農や遊休農地の有効活用など農業の新たな取組として、日本一のレタス産地である長野県川上村との農業技術交流によるレタス栽培「シンカプロジェクト」に取り組んでいます。恩納村を訪れていただいたみなさまに、地元産の安全・安心なレタスを提供し、おもてなしをしたいと考えています。

恩納村と長野県川上村とは30年来の交流があり、2016年度には友好姉妹都市提携を締結しました。川上村の夏場の気候と恩納村の冬場の気候が似ているため、レタスを通して農業技術交流ができないかと始まったのが「シ

ンカプロジェクト」です。「シンカ」とは、沖縄の方言で仲間を意味する「シンカヌチャー」に由来しています。これまで、恩納村ではパッションフルーツやアテモヤの果樹のほか、小ギク、切葉、観葉の花弁類やサトウキビなどを栽培していましたが、レタス栽培は行っていませんでした。レタス等の生鮮野菜を栽培することは、農地の有効活用や農業の効率化のために有効ですが、野菜栽培の技術や経験が少なく恩納村としては大きな課題でした。

まず始めに取り組んだのが土壌作りです。恩納村の土壌は沖縄県特有の赤土の酸性土壌であるため、野菜づくりには適していません。そこで、川上村シンカプロジェクト代表である、遠藤喜幸氏（川上村農家）の指導の下、土壌改良剤等を投入し試行錯誤を重ね、レタス栽培に適した土壌までPH(6・



▲レタス収穫体験をする子どもたち



▲イベントでレタス販売

5〜7・0）を調整することができました。次に、定植から出荷までの栽培を行うっていく過程において、有害鳥獣であるタイワンシロガシラに食べられるため、糞を落とされたりする被害があったため、捕獲箱や凧及び防鳥ネットを設置する対策を行ってきました。苗作りからレタス栽培工程等については、11〜2月の期間中、川上村から農家の方に来沖していただき、丁寧な技術指導により良品なレタスを栽培することに成功しました。

試験栽培を経て本格的に恩納村レタス研究会を立ち上げ、農家が栽培を開始してから3年目を迎えますが、徐々に秀品なレタスが安定的に栽培できるようになっていきます。今後の課題として、村内での地産地消が十分に浸透していない状況であるため、現在取引を

行っている仲卸業者や量販店の協力を得ながら安定した販路を確保するとともに、リゾートホテル等地域で需要の高い生鮮野菜などの高付加価値品目への転換を図り、農業を活性化させたいと考えています。

サンゴの村宣言

本村の最大の特徴は、サンゴ礁海域をはじめとする恵まれた自然環境であり、この自然環境のあり方が本村の衰退に関わるといえます。しかし、近年はオニヒトデの大量発生、赤土等の流出、海水温の上昇によるサンゴ白化現象等により、サンゴ礁が減少している状況です。

そのため、村民一人ひとりの自然環境に対する意識の向上を図り、本村の豊かな自然環境の保存と育成を行い、地域資源を活かした「恩納ブランド」の確立に向けた「サンゴの村宣言」プロジェクトに取り組むこととしました。

2017年度から事業に取り組み、

キャラクター



名前：Sunna ちゃん

フォーラム

ロゴマーク・キャラクターの公募、キックオフイベントの開催、庁内プロジェクトチームや恩納村サンゴ確保全再生活動地域協議会を設立し、2018年7月21日の「第35回うんなまつり」で宣言しました。セレモニーにはオリジナルキャラクターの「Sunna(すんな)ちゃん」が登場し、子どもたちと一緒にセレモニーを盛り上げました。

宣言に伴い、「サンゴのむらづくりに向けた行動計画」を策定し、サンゴに関するオリジナルの絵本とカルタを作成、小中学校の総合的な学習の時間でのサンゴに関する学習・観察会の開催、3月5日のサンゴの日にはサンゴの苗植え付け・グリーンベルト植え付け・ビーチクリーンを実施し、村内外



▲宣言セレモニーで子どもたちとSunnaちゃんがダンス



▲グリーンベルト植え付けの様子

から多くの方が参加しました。

また、恩納村コープサンゴの森ネットワークや日本UNEP協会とパートナーシップ協定を締結し、より一層の連携を図り、SDGsによる様々な取組が推進されるものと期待しています。

今後の具体的な取組として、環境税(持続的なむらづくり推進税)、ローカル認証制度、Green Fins(グリーンフィンス)の導入など、観光・消費活動が環境保全につながる仕組みを導入し、自然環境負荷の小さな観光スタイルの創出や観光客への啓蒙を行い、本村の観光の高付加価値化・ブランドディングに結びつくような有機的なつながりを構築していくこととしています。これにより一次産業から三次産業まで村民各々の個性に合わせた雇用



▲「サンゴの村宣言」ロゴ

を生むことができ、「誰ひとり取り残さない」村民全員参加型社会を実現し、住民が自己実現できるだけでなく、格差解消に向けた積極的な打ち手になると考えています。

おわりに

現在の好調な観光産業により、恩納村は沖縄県を代表する観光リゾート地として発展し、多くの観光客で賑わいを見せている一方、少子高齢化が進み若年層の減少が顕著となっています。

「サンゴの村宣言」プロジェクトにより、農水産業と観光産業が連携し、付加価値の高い雇用を生み、若者世代が住みやすく子育てしやすい、持続可能なサービスクラスが集積したむらづくりを目指していきたいと考えています。

恩納村長 長浜善巳



## 2019年 開催決定!

# 町村から日本を元気にする

入場  
無料

11/30(土)・12/1(日)

## 東京国際フォーラム

## 随 想

私が住む基山町は、古くから九州の交通の要衝として、長崎街道が、まちの真ん中を通り、多くの旅路を支えてきました。現在も、九州縦貫道の基山パーキングエリア内に、高速バスの縦貫道と横断道の乗り継ぎ拠点でもある高速バス停「高速基山」があり、福岡空港や博多駅、天神などに直結しています。また、鉄道でも、JR博多駅から快速で23分とい



う利便性を備えているほか、国道3号線や主要県道等により、日常の交通網も充実しており、人流、物流等の拠点となっています。

特に、つつじやもみじの名所の大興善寺が多く、観光客を集めているほか、近年では、オーストラリア原産の大型鳥「エミュー」が、400羽以上飼育されるなど、町の話題性が増しています。更に、本年7月にはライチの観光農園がオープンするほか、神社・仏閣巡りプロジェクトなどの動きも出てきており、短期滞在型の交流拠点として、交流人口の増大が期待されています。

また、体育館、武道場、多目的運動場等が整備され、交通の便と広い駐車場という優位性もあり、九州大会規模の各種スポーツ大会が、年間100回以上開催されています。その意味で、基山町は、まさに「交わりのまち」なのです。

もう一つが、「混ざりのまち」です。まず、基山町には、1354年前に、古代の朝鮮式山城「基肄城」が築城されました。この築城は、白村江の戦いにて、百濟、日本の連合軍が、唐、新羅の連合軍に大敗し、その後の侵攻から大宰府を守るために行われた

ものですが、結局、唐と新羅の侵攻はありませんでした。その際、その工事にあたったのが、沢山の亡命百濟(現在の韓国)技術者でした。その結果、沢山の韓国文化が基山町に流入し、広がり、基山町の生活とまじり合っていったわけです。基山町の代表的な祭り、「御神幸祭」にも、獅子舞をはじめ、韓国文化の影響が色濃く残っています。つまり、韓国と基山町が混ざったのです。

次が、1598年からの273年間です。この間、基山町は、対馬藩の飛び地でした。同藩の代官所がおかれ、整然と優れた統治が行われ、特に、1675年から11年間、副代官として大活躍した賀島兵助公は、多くの制度改革を行い、基山町を大きく発展させました。その偉功をた

たえ、今でも、毎年、賀島公の命日には、副代官を偲ぶ法事が、対馬市長をはじめ大勢の参拝者を招き、盛大に行われています。対馬との混じりは、基山町に多くの変化をもたらしました。まずは、藩校「東明館」が設置されました。現在、基山町には、その藩校の名前に由来する、中高一貫の私立校の「東明館学園」があります。また、産業面においても、

養蚕や配置売薬などが、対馬から入ってきました。現在でも、基山町では、多くの方々が家庭薬配置業で生計を立てており、この小さな町に、二つの製薬会社があるのも、特筆すべきことだと思えます。つまり、対馬と基山町が混ざったのです。

そして、三つ目が、1970年くらいからの30年間の基山町のベッドタウン化です。この間、基山町人口は倍増しました。全国各地から、多くの方々が基山町へ移住されました。当初あった旧住民と新住民の壁も、スポーツや文化活動等により交流が進み、壁は徐々に低くなり、今では理想の形に近づいています。つまり、新しい基山町と古い基山町が混ざったのです。

これらの「交わり」と「混ざり」は、現在、基山町が進める地方創生の動きの中でも、その特性が十分に生かされており、国内外からの多くの観光客や移住定住者等の受け入れを通じて、本町に新たな展開を生み出していくと確信しています。

# さまざまな「集いの場」を 演出いたします

東京でのイベントに最適な  
絶好のロケーションを誇る全国町村会館。  
かけがえのないひとときを、  
上質なサービスでおもてなしいたします。

県人会など同郷者の集い、  
同窓会、親睦会などの懇談会

観光PR、移住セミナー  
職員採用試験などの説明会

職員旅行・家族旅行

広さと設備が多彩な大ホールと、3つの  
会議室がございます。  
会議・研修、パーティーなどに幅広くご利用  
いただけます。



## 和・洋食のレストランも お気軽にご利用ください

全国町村会館には、  
会議室・宴会場のほかに、  
ふたつのレストランもございます。  
お気軽にお立ち寄りください。



カジュアルレストラン「ペルラン」



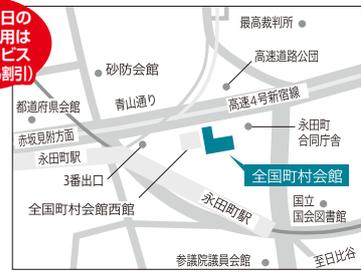
和食処「さいかち」

**客室のご案内**

<b>SINGLE ROOM</b> シングル 119室	<b>DOUBLE ROOM</b> ダブル 12室	<b>TWIN ROOM</b> ツイン 18室
------------------------------------	----------------------------------	--------------------------------

和室もございますのでお問い合わせください。(禁煙ルームもご用意しております。)  
※市町村職員共済組合等の宿泊助成券がご利用いただけます。

週末・祝日の  
宿泊ご利用は  
特別サービス  
(最大20%割引)



ご予約・お問い合わせ

**全国町村会館**  
**TEL.03(3581)0471**  
FAX.03(3581)0220  
〒100-0014 東京都千代田区永田町1丁目11番35号  
ホームページアドレス <http://www.zck.or.jp/kaikan>

- 全国町村会館へのアクセス
- ・有楽町線・半蔵門線・南北線「永田町駅」3番出口徒歩1分
  - ・丸の内線・銀座線「赤坂見附駅」徒歩8分
  - ・タクシー東京駅から約20分

